

はじめに

今回の海外視察にあたって、各派幹事長会議で決定された実施要綱に基づき、アメリカ方面で可能な訪問都市の選考を行った。

従来の箱物視察を改め、人的交流を軸に様々な立場の人との交流を通じて都市政策の課題について学ぶことを第一の目的と定め、新たな議員視察のモデルとなるよう心掛け、訪問都市の選考を行った。

候補都市としては、姉妹都市であるアメリカのサンフランシスコ、ブラジルのサンパウロ、大阪事務所のあるシカゴをはじめロサンゼルス、ワシントン、ニューヨーク、カナダのトロント、バンクーバー等都市政策の視察にふさわしい都市がリストアップされた。

サンフランシスコについては、昨年9月に姉妹都市50周年の記念式典が行われた関係で、議長、運営理事、各派幹事長が訪問しており、視察場所も重複することが予想されるため除外した。シカゴについては、昨年12月に副議長が訪問しており、同様の理由で除外した。

我々としては、議会の代表団として、内容的にも実のある視察のできる都市選択と、そこでの議会交流のみならず民間との交流も含めて対応できる場所を求めて、関係局に様々な資料の提供をお願いした。

その結果、本年6月に移民100周年事業を控えたサンパウロ市を訪問し、現地日系議員や大阪出身者で組織されている「なにわ会」との交流を柱に、バイオエタノール事業等を視察し、クリチバ市の交通施策や環境対策も盛り込み実施することにした。

くしくも議員の海外出張としては、平成9年(1997年)以来、交流が途絶えており、ブラジル政府からも公用ビザの発給の許可が下り、政府の公式訪問団として迎えていただけたこととなった。

大阪市会における海外出張で、相手国政府から公用ビザの発給が認められたのは初めてのことである。

また、アメリカにおいては、私がかねてから個人的に親交のあるニューヨーク市議とワシントン市議にメールを送ったところ、「時間の制約はあるものの、可能な限り調整して大阪市会議員団との交流を図りたい。」との返事をいただき、都市政策についての議員交流というテーマで両都市を訪問することとした。

道州制議論が闊達に議論されるなかで、州政府と様々な施策等について議員間交流を通じて学ぶことができれば、道州制の中での政令指定都市の位置づけや目指すべき方

向が見えてくるのでは・・・と考えた。

ニューヨークでは、犯罪都市としての汚名返上に大きな影響を与えたといわれている「B I Dシステム」というまちづくりの手法等について視察することにした。

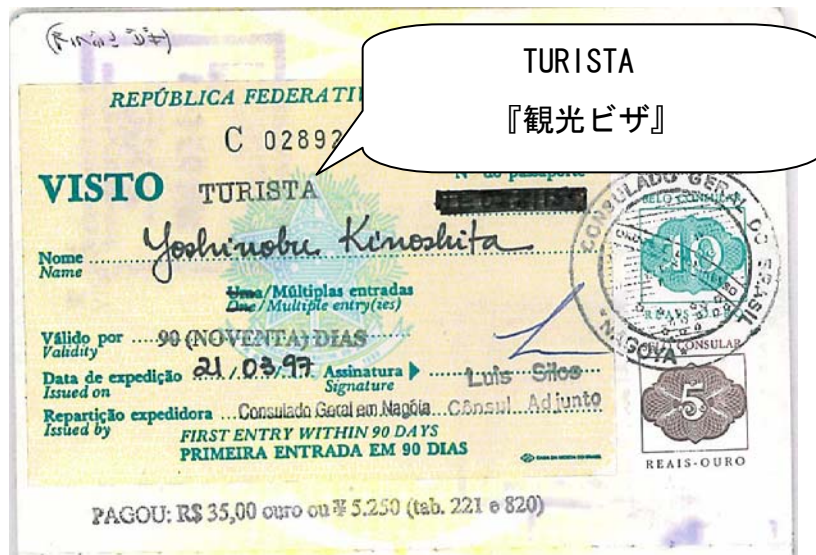
そのほか、女性議員からの強い要望で、働く女性を支援する子育て支援事業や保育所事業についても視察できるよう現地で交渉することにした。ワシントンでは、訪問日がスーパーチューズデーの後ということで、在アメリカ日本大使館を訪問し、大統領選の行方や日米間における政治課題について意見交換できるよう手配した。

以上のような視察項目を議長に提出し、許可をいただき、6泊10日という強行軍ながら今回の視察を実施することとなった。

訪問都市が決まったことで、事前勉強会を実施し、1月23日には南米編、24日は北米編と2日間、各都市の現状や課題について学習する。

以下は、今回の視察行程に従って各訪問都市での視察報告である。

●前回のブラジル視察（平成9年4月）



●今回のブラジル視察



2月4日（月）

10 時 30 分、ニューヨーク、J A L 006 便、ジョン・F・ケネディ国際空港着。みぞれまじりの雨が降っている。

J F K 空港では、在ニューヨーク総領事館の浜田隆領事が出迎えてくれる。一行は、何のトラブルもなく入国審査を終え、専用バスでマンハッタンへ。移動と昼食の時間を考え、13 時 10 分にニューヨーク市役所を訪問の予定だったが、機内での食事の関係もあり、昼食をやめてグラウンドゼロの視察を入れる。

＜グラウンドゼロ＞

2001 年（平成 13 年）午前 8 時 46 分。マンハッタン南部に位置する世界貿易センターの 110 階建て 420m の超高層ツインタワービルに、ハイジャックされた民間航空機 2 機が相次いで突入し、その後、2 棟のビルは崩壊した。この同時多発テロ



は、アメリカの歴史に大きな衝撃を与え、「テロとの戦い」がブッシュ政権 1 期目の安全保障上の最重要課題となった。

当日のテロ被害は、国防省（ペンタゴン）、ピッツバーグでも発生しており、犠牲者の総数は約 3,000 名（うち日本人は 24 名）。日本政府は、ニューヨーク州とニューヨーク市に対して、1,000 万ドルの支援を提供した。

グラウンドゼロと名づけられた跡地の開発については、州と市が共同してロウーマンハッタン開発公社を設立し、5 つのビルとテロ犠牲者の追悼施設を含む複合的な施設として計画されている。なかでも、「フリーダム・タワー」と呼ばれる 82 階建て高さ 1,776 フィート（約 541m）の高層ビルは総工費 15 億ドルと言われ、ニューヨークの新たなシンボルとして注目されている。



グラウンドゼロの現在の様子



柵で囲まれたグラウンドゼロ

<ニューヨーク市役所>

13 時市役所着。入り口で保安検査を受け、庁内へ。



ニューヨーク市役所

ニューヨーク市議会事務局次長のラファエル・ペレス氏の案内で、庁内を案内してもらう。

ニューヨーク市役所は 1812 年に建設され、当時は裁判所と議会、警察が入っており、地下には刑務所も併設されていた。現在は、主に議会棟として使われており、市長のオフィスもこの建物の中にある。

議会は 51 選挙区から選ばれた 51 人（現在は、民主党が 48 人、共和党が 3 人）の議員で構成されており、任期は 4 年で 2 期までしか務めることができないが、欠員が生じた場合はこの限りではない。欠員事由の多くは州政府や連邦政府への転身が多いとのこと。



市役所 1 階ロビーでの視察団

会計年度は 7 月 1 日～6 月 30 日で、例えば 2008 年度予算は、2007 年 7 月 1 日～2008 年 6 月 30 日となる。予算規模は、全会計で 550 億ドル（約 6 兆円）。市で審議された予算が州政府に承認されなければ予算を執行することができない仕組みになっており、州政府と対立する施策については承認されないこともあり、州政府が絶対的な権限を握っている。

<公聴会>

ペレス氏の案内で、公聴会を傍聴させていただく。

この日の公聴会は、「労働者を保護する法律」について審査が行われていた。建築現場等で事故が多く、けがをした従事者を保護する法律を作ってほしいという要望に対して、関係する委員会の議員が直接、当事者から陳情を受ける場となっている。もちろん、雇用者側の発言者も控えており、双方の意見を聞く場である。この場に理事

者の姿はなく、公聴会を終えて議員だけで委員会としての判断を決定し、市長に報告する。市長は、その委員会の決定を受け、必要に応じて法律の制定や予算化する等して施策の一つとして執行する。ある意味では、議会主導の行政運営のモデルだと感じた。



アメリカの各議会では、公聴会制度が一般的な議会運営として定着しており、連邦議会や州議会の公聴会に市長自らが出席し、要望を述べることもあるという。公聴会への参加制限はなく、国籍や年齢等は問われない。場合によっては、私がツーリスト（観光客）の1人として、公聴会で要望することもできるとのこと。

公聴会の様子

公聴会は、各委員会において必ず月1回は開かなければならず、ほぼ毎日どこかの委員会が開かれている。だれでも傍聴することができるので、私たちも入室が認められた。この日の公聴会では、ディラン委員長から「大阪からようこそお越しくできました。」とねぎらいの発言をいただいた。

大阪市会においても、請願者や陳情者に発言の場を求める声があるが、政治的なパフォーマンスとして提出されているものも多く見受けられる状態で、中には同じ内容のものが各区ごとに提出されているものもあり、代表者の意見開陳だけで24人が発言するというのは現実的ではないような気がする。

アメリカの議会のように成熟した公聴会制度に至るまでの経過や問題点については、さらに、大阪市会として研究していかなければならない課題であると思う。



写真撮影も可能です

＜ニューヨーク市議会 メリンダ・カッツ議員＞

14 時、メリンダ・カッツ議員事務所訪問。

現在、ランドユーズ委員会（歩道などのサイドウォークカフェの設置に関する許可



要件の審査などを行う委員会）の委員長。申請のあった店舗に対して、何時から何時まで、どのエリアを占有して営業してよいのかというのを審査して許可の決定を行うとのこと。

カッツ議員は民主党所属で、ヒラリー・クリントン上院議員の後釜候補として有力視されている。また、現在、ニューヨーク市 3 役（市長、コントローラー、パブリック・アドボケート）といわれるコントローラーに立候補しようとしており、女性議員のカリスマ的存在として注目されている。

※コントローラーとは、市の年金制度を管理する責任者のこと。

カッツ議員との懇談の中で、「ニューヨーク市議 51 人のうち 16 人が女性で、アメリカ全体でも地域差はあるものの 11%～18%が女性議員である。市民の代表者として、女性の立場で発言する女性の活躍を期待している。」と同行の女性議員らを激励した。

ニューヨーク市議の経費については、議員個人の平均給与は約 9 万 2,000 ドル（約 1,000 万円）で、カッツ議員のような役職者は約 12 万ドル（約 1,300 万円）～約 13 万ドル（約 1,400 万円）。給与とは別に事務費として約 28 万ドル（約 3,080 万円）が支給される。この事務費を原資として秘書やスタッフを雇用し、事務所を維持しているとのことである。また、事務所も 30 坪はあるとおもわれる個室が市から無償で提供されており、マンハッタンの一等地の家賃を考えれば、市民の代表としての環境の違いを見せつけられた思いがした。



このビルの 14F～18F が議員のオフィスフロアとなっている



各フロアには入室チェックのカウンターが…

大阪市会では、これらの政策スタッフを含む経費として政務調査費が支給されているが、事務所の借り上げ費等の経費負担が大きく、ニューヨーク市のように充実した政策スタッフと活動拠点となる事務所のあり方を見直していくことが議員活動のポテンシャルを高めることになるのではないだろうか。

議員は、市民の代表として活動しているのでありその活躍を期待されているわけだから、その活動環境を整えることを検討されるべきであると思う。定数の削減や給与の減額等マイナス方向に議論を進めるのではなく、逆にプラス方向に舵を切り、議員に対する地位や待遇面を改善し、より高度な議員活動を求めていくようなプレッシャーをかけられるだけの市民コンセンサスが必要な時期にきているのではないかと感じた。



カツ議員の事務所からはブルックリン大橋が見える



反対側からは、市役所を見下ろせる
明日のパレードに備えて特設ステージが設置されている

< B I D システムについて >

15 時 30 分、(財)自治体国際化協会ニューヨーク事務所訪問。

当初予定していた 42 丁目の B I D が、日本出発直前になってキャンセルとなったため協会に依頼し、B I D のシステムについてレクチャーを受けることとした。説明は、総務省から出向されている佐々木浩所長と堺市職員の中菌祥所長補佐が担当してくださった。

※ B I D については別添資料参照

(佐々木 浩 所長)



つまり、B I Dは受益者負担制度である。地主やビルのオーナーが通常の税に賦課金を上乗せし、その賦課金を使って町の価値を高める様々なまちづくりを進めていく



ものである。そのエリアが高い評価を得られれば土地の価格が上昇し、地代や賃料を上げることができるインセンティブ・システムである。土地の価値を高めるためにどのような賦課金の使い方をするのかについては、B I Dの知恵と工夫による。

B I Dについて説明を受ける 　　ある意味では、地元のコンセンサスさえ得られれば地域が望む形の街づくりを進めることができる。分譲マンションの管理組合のような組織運営であると考えるのがわかりやすいと思うが、マンションの場合、管理費は直接管理組合に払うが、B I Dの賦課金は税として市に納めるのである。このことによって地主等は、経費として税法上の控除を受けることができるのである。市は、納められた賦課金をピンハネすることなくB I Dの口座に入金する。市を経由することで公金としての色がつくが、それだけにいい加減な使い方はできないようになっている。

組織化されたB I Dがつぶれることは少なく、少しでも問題があれば、B I Dを立ち上げることはできない。

B I Dが組織化された段階で地主等は増税となるわけで、増税分を取り返そうという地元民の意識が芽生え、土地の評価を上げようとするモチベーションが上がってくる。うまく運営されれば増税分以上の土地の値段が上がるため、有効な投資手段であると同時に、B I Dを活用することによって安心できる地域ネットワークが存在することをアピールでき、地元民のステータスとしても高い評価が得られるのである。大阪市に当てはめていろいろと考えてみたが、住宅地域よりもキタやミナミの商業地域のほうが馴染むのかなあと思った。根本的に日本人の意識レベルとして、プラス思考での投資という考え方が定着するのかが問題だと思う。

ただ、ニューヨークのように、ひとつの成功例が広く知られることによって全市的な広がりを見せたことは、大阪市の取り組み次第では、これからの有効なまちづくり手法として検討の余地はあるように思う。

蛇足だが、議会への環境整備もこの意識の延長線上にあるように思った。B I Dを市会議員に置き換えて読解すればご理解いただけるのではないだろうか？ 地域の高い



良識のなかで、有効な議員に投資するようなモチベーションが確立されれば、有能な議員育成プログラムとして注目されるのでは・・・と考えたのは私だけでしょうか？

17 時 30 分 視察終了

18 時 ホテル着

2月5日（火）

今日はスーパーチューズデー。全米 24 州で今秋行われるアメリカ大統領選挙の予備選挙が行われる日である。ニューヨーク州も今日が投票日。

また、午前 11 時から、一昨日（2 月 3 日）に行われた全米プロフットボール（NFL）のスーパーボールで優勝した地元ニューヨーク・ジャイアンツの優勝パレードが行われることもあり、交通規制等の関係から午前中は自由視察にすることにした。昨日は初日からかなりハードな視察スケジュールを組んだため、体調の維持と時差ボケ解消の意味を込めて、個々に対応していただくスケジュールにした。

<ニューヨーク・ジャイアンツの優勝パレード>

私は、ニューヨーク・ジャイアンツの優勝パレードというものがどんな雰囲気で行われるのか興味があったので、地下鉄に乗ってニューヨーク市役所へ向かうことにした。午前 10 時すぎに宿泊先の最寄り駅であるグランドセントラル駅から乗車したが、まるでラッシュアワーのような満員状態。それも、皆ブルーのジャイアンツのユニフォームを着た連中ばかり。



まるで甲子園球場にむかう阪神電車のように。プラットフォームでもすし詰め状態の電車内でも、誰か一人が音頭をとると皆で応援歌を合唱するくらいの大騒ぎ。結局、シティーホール駅（市役所前）で降りることができず、1駅先のフルトン駅で下車。地上へ上がると車道にはみ出す人、人、人……。皆、ブルーのユニフォーム姿。優勝パレードは、バッテリーパークを11時にスタートして市役所までの約1.2キロメートルをパレードするというもので、昨日、市役所を訪問した際に設置されていた特設ステージは、このパレードのためのものでした。当初は、スーパーチューズデーの集会が行われるのかと思っていた。



ニューヨークはジャイアンツカラー一色



詰めかける人・人・人……

ある程度の混雑は予想していたので、昨日訪問したカッツ議員の事務所からパレードが見ることができれば……と思っていたが、これだけの人をかきわけて市役所に向かうのは無理と判断し、沿道で見ようと思ったが、沿道はすでに超満員。さらに、続々とファンが押し寄せてきており身の危険を感じたため、パレード見学を断念。

ちょうどその時、悲鳴に似たような大歓声。バッテリーパークに向かう選手たちを乗せたバスが通過。選手の名前を呼ぶ合唱コールが鳴り止まず。



歩道も一杯の人で歩けない



パレードを待つ人の列



選手を乗せたバスが通ると大歓声

昨年テレビでボストン・レッドソックスの松坂投手の優勝パレードを見たが、たぶん沿道はこんな状態だったのだろうと思った。やっぱりパレードはテレビで見るに限る！混雑する前に帰らなければ午後からの視察に間に合わなくなってしまう。



パレードの後はご覧のとおり…
シュレッダーを上からまいてます